



No.66
25周年
記念号

発行: 令和4年7月22日
茨城県青年海外協力隊を育てる会
発行人: 小川一成
編集: 広報文化委員会
事務局: つくば市高野台3-6 〒305-0074
JICA筑波センター内
TEL 029(838)1111
印刷: 合資会社おおた



平成9年1月にスタートした「茨城県青年海外協力隊を育てる会」が25周年を迎えました。

こんなに時を刻んで「随分と遠くに来てしまったなあ」と感慨ひとしおです。

25年前に手探りで始めた「育てる会」でしたが熱い想いだけは本物でした。

スタートして間もない5周年（H14）には無謀にも「第10回開発教育全国集会」を茨城に誘致しようと名乗りを上げました。

全国の育てる会の皆さんをつくば市に招いて2日間に渡る一大イベントです。

基調講演は三浦朱門先生にお願いしました。

この一大事業を見事にやり遂げ、茨城県の育てる会は一躍東京の本部でも注目される存在になりました。

時を同じくして、設立3年目（H11）には協力隊を受け入れている途上国と息の長い交流をしようと検討を重ねた結果、当時あまり知られていなかったラオスに注目して第1回スタディツアーを実施し現地調査を行い、翌年（H12）には再度ラオスに入り、更に奥地のルアンパバーンを訪問しました。

ルアンパバーンの中心地の小高い丘にあるCCC（子供文化センター）を偶然尋ねた折り、そこでボランティアをしていた原田悦子（元隊員）さんとの運命的な出会いが今日、ルアンパバーンのCCCとの交流の原点です。

我々が帰国した後に、原田さんから「CCCの子供達に日本を体験させてあげたいので力を貸して欲しい」との要請をうけ、5周年の記念事業の一環としてラオスの子供達を招聘することにしました。原田さんに引率されて来日したCCCの子供達10人は記念式典で歌と踊りと人形劇を披露しました。

この事が縁で、今日までラオスへのスタディツアーは毎年のように行われCCCとのつながりはより強固なものとなっていきました。

平成30年に行われた20周年記念式典ではCCCから15名を招聘し、ラオスの見事な伝統舞踊を披露して花を添えました。

この25年の間にルアンパバーンのCCCから日本に招聘した指導者と子供達は50人を超え、同じく日本からスタディツアーでCCCを訪問した人数もその数を上回り、より強固な交流が築かれて大きな成果を上げて来ました。

コロナで中断しているCCCへのスタディツアーが今年こそ実現できることを期待したいと思います。



20周年記念で招いたラオスの子どもたち



ラオスの子どもたちによる民族舞踊

“つづける” という事について

「柔道は国際理解、国際化教育に最適、最高」

育てる会 理事・鹿行支部長 仮屋 茂

《柔道についての思い》

私は青少年に柔道指導をするようになってから今秋に50周年を迎え、こうも長く携わるなど思いもしなかった。実業団、高校生、中学生、小学生への指導を経験しながら今では幼稚園の授業も6ヶ所受け持っている。柔道は日本が世界に誇る伝統の武道であり、オリンピックでも大活躍している事は誰もが承知である。厳しい練習に耐えて努力し心身を鍛錬するという特別なスポーツである。子供の頃から勝つための過度の指導としてのシゴキや根性論が優先される事が常態化してこれが体育会系の特徴として習慣化していた。しかし近年これらの影響もあって柔道人口の激減現象に歯止めが掛らない危機的状況が続いていた。一方これまでお家芸であった柔道も世界のレベルが向上してきてその地位も危く成って来ている。先の報道で全日本柔道連盟は小学生の全国大会個人戦を廃止する決定がなされた。これは永い間 心身の発達途上の子ども達に勝利至上主義の指導が成されていることに大きな問題があるという理由からであり、至極当然・明確である。私は少年の指導をする中でいつもこの事で悩んできた。大きな疑問を持ちながらもこの伝統、風習、習慣の組織の中では何ともならない困難があった。ところが日本スポーツ少年団の活動組織に巡り合ってからこれら難題に小さな光明を見出す事となった。

《柔道に依る国際交流活動》

それは国際交流活動であった。ドイツをはじめフランスやアメリカ、カナダ他との柔道に依る国際交流活動は

この50年で100回を超える内容となった。これら諸外国ではスポーツクラブとして各種スポーツ種目を実施し柔道もその中の一つとなっている。このスポーツクラブは地域のクラブとしてその地域のいろいろな年代の人々が好きな種目を幼児から高齢者まで楽しんでいるのである。「より早く始めより長く活動して健康で豊かな人生を送る」という趣旨で地域のコミュニティを形成している。このために国家の医療費の低減に貢献している一大国策となっているのである。日本ではとても信じられないこの事実には大きな衝撃を受けてその後の人生が劇的に変わったのであった。これを経験する度ごとに新しい気づきと発見、学びが起こって来た。“狭い日本 そんなに急いで何処へ行く？”のコマーシャルが流行った時代に世界観が広がった痛快さを覚えた。日本しか見たこと、経験が無かった者にとっては異国での経験は例えようが無い世界が広がりそこからの新しい気づき、発見の学習はまるで生まれ変わったかのように新しい物の見方や考え方が底なしに広がっていったのであった。

“お前は、柔道はお家芸であるのになんで外国に行くのだ”とよく嘲笑され白眼視されていた。しかしこれら経験による学習成果と自信からこれに対し“日本を見に外国へ行くんだ”と自慢していたものであった。間違いなく行く度ごとに新しい気づきと発見、学びを成し充実感、達成感に満たされていた。そこには尽きない夢と希望が膨らんでいったのであった。最大の気づきは外国の柔道人の方がはるかに真の柔道理念と哲学を身につけていて、そこから日本人の柔道人に強い憧れを抱いている現実気づいたのであった。“エッ たかがある小さな地域の柔道人でしかない”と思い日本では余計な事をしている者として排除、無視されている自己嫌悪の惨めさの中で苦悩していたのであった。だからこそその大きな気づきと発見となりその後の生き方を大転換する契機となったのであった。「柔道は柔道を日常生活に活かして初めて柔道になる」を体現、自得する事となった。伝統や風土が違う国同士でありながら結局は地球上に住



ドイツ 心柔道クラブ 2015年

んでいるとして平和に生きる事を共有している仲間だという尊厳を意識出来るようになりお互いの存在が無くてはならない関係と発展していった。親戚以上の付き合いが始まりお互いの人生に支え合う無くてはならない存在となった。その一番の要因はお互いに柔道家であった事である。柔道活動を通してお互いの人生を紡ぎ上げている仲間であったからである。地球の裏側の遠い存在に在るからこそお互いを思いやる心が通じ合うのがあった。言葉や生活の仕方、働き方、生き方、それぞれの地で大きな違いが有りながら共に仲間として生きる事への共感を共有しながらの生活をしているのである。

《今後の活動へ向けて、夢と希望》

こういう事から今では世界の共通語である英語への興味も一段と深まった。さらについでにこのコロナ禍の空虚、空白を埋める心意気でドイツ語、フランス語、スペイン語に挑戦してやがて3年となる。「石の上にも3年」で確かな手応えを感じながら国際交流活動の一刻も早い復活を待ち切れない昨今である。柔道への想いは益々深く熱いものとなっている。世界に出て行って日本人としてそして柔道人としての自信と誇に気づかされ世界中にこの素晴らしい「忘己利他」の柔道理念を普及しなければならぬと覚悟しこれがさらなる仕事へとかきたてる。新しく始まったフィリピンのネグロス島への柔道指導は今や6ヶ所の大学へ拡大している。かつては飢餓の島と言われ発展途上国ならではの犯罪学を学ぶ学生にとっては実学として柔道は最適として注目を浴びて来ていた。ところが今や柔道部だけでなく全学生達を対象として必須なものとして重宝されてきている。こういう活動が人生を紡いでくれているお蔭で今では高齢者となったが夢と希望は尽きない。柔道への熱情は深まるばかりであり心身の鍛錬には日々終りはない。高齢への心身の衰退は定めではあるが「今が最も若い」は事実であり100歳人生の今これからが本番である。これまでの生き方を如何に生かせるかが本命である。「明日死ぬかのように生き 永遠に生きるがごとく学ぶ」が尽きない興味となり佳境に入っていくのである。“楽しからずや”である。

「障子を開けて外を見よ、外は広いぞ」、「井の中の蛙 大海を知らず」である。「若い時の苦勞は買ってでもしろ」、「一步踏み出すその勇氣」とよく言われる。

「2度とない人生」である。サラリーマン生活をしながら柔道ボランティアによる生き方に難行苦行しながらの海外への挑戦はそれは口で表現できない辛苦の内容が有った。仕事や家庭そして人生を賭けての必死の覚悟が有った。道なきところへの道をつくりそして繋ぎ発展させる仕事は並大抵のことでは無かった。しかしだからこそすべての事に真剣そのものが有った。命がけの使命感と覚悟が有ったからこそ成し終えた時の感動と感慨からの気づき、発見、学習は得られない格別な優れものとなった。

《協力隊を育てる会とのかかわりについて》

このような活動をしながら人生を紡ぐ中で長男が青年海外協力隊員としてシリアに柔道指導に赴任したのであった。2年の任期を1年延長し3年間滞在した。スポーツ少年団員時にドイツ、フランスへの交流派遣の経験と我が家での多くの海外の柔道家との交流経験が有り結果としてこれらがその要因として繋がっていったようである。縁が有り帰国後は講道館の国際部の職員となり派遣隊員の事前研修を担当している。眼に見えぬお蔭さまに感謝するばかりである。私はこの事から茨城県育てる会の会員として長くお世話になっている。このコロナ禍の中派遣隊員は無論の事 これから派遣希望の隊員も先への見透しが見つからない中で大きな悩みを抱えているものと思われる。一刻も早い復活を願うばかりである。海外青年協力隊員の活躍は素晴らしいものが有り日本の宝である。コロナ禍、自然災害、またロシアのウクライナ侵攻など厳しい環境の中で世界平和を改めて痛感する今、さらなる飛躍、発展を強く願うばかりである。



ドイツ フルタ柔道クラブ 2013年



フランス柔道連盟 2012年

活動報告 前編

「え？ ジンバブエ？ どこ？」

2019年度2次隊／ジンバブエ／
体育 小倉 奨平

「派遣国 ジンバブエ」。この衝撃は今でも忘れない。合格した喜びよりも先に「え？ジンバブエ？どこ？」という感情になった。私の協力隊活動はジンバブエについて調べることから始まった。その後、国内での訓練を経て多くの仲間たちと出会い、出国の日を迎えた。これからの2年間でどんな経験をしてどんな人々と出会うのか、気分が高揚していた。

しかし、そう上手くはいかなかった。言葉の壁である。訓練であれだけ勉強した語学だったが、何と云ってもこれが私にとっての初海外。頭が真っ白になって英語が出てこない。オレンジジュースすら頼めなかった時には自分が情けなくなった。これではまずいと思い、生活の中で時間がある時には積極的に英語で話すことを意識した。時には、同期に見守られながらスーパーでの買い物の練習やタクシーの交渉の練習、両替の練習もした。

そんな日々を過ごし迎えた任地赴任当日。同じ方面の同期たちと車に揺られ続けた。数時間前まで一緒にいた同期たちが一人ずつなくなっていく。高揚していた感情に寂しさが顔を覗かせる。そしていよいよ自分の番となり、任地・配属先に着いた。どんな配属先なのか心配していたがみんな優しく歓迎してくれた。次にこれから住むことになる家へと案内された。協力隊あるあるだが、隊員によって住居に大きく差がある。大体は赴任してみなければわからない。私の家はというと、住み始め

て気付いたことだが、なかなか趣深かった。水と電気は止まることがほとんど。屋根はトタンで所々隙間が空いており、太陽の光が入ってくるだけでなく、隙間風、雨の日に寝ていると水滴が顔に落ちてくる。お世辞にも綺麗とは言えなかった。しかし、経済的に苦しいにも関わらず、配属先が私のためにと、見ず知らずの日本人のために改築して家具も揃えてくれていたことが嬉しかった。もしも逆の立場だったら私は同じことができるだろうか。着任早々、日本では感じることのできないジンバブエ人の優しさ・暖かさを感じ、私の新たな“居場所”ができた。



教育実習生指導に訪れた小学校の児童たち

配属先は、ジンバブエ第3の都市ミッドランズ州グウェルにあるムコバ教員養成校体育科だった。日本でいう大学の教育学部に当たる機関である。活動内容は、体育の授業やワークショップの実施、各地の小学校を巡回しての教育実習生の指導、教科書作成、アンケート調査によるジンバブエにおける体育の実態調査、日本の学校



体育科の生徒たちと同期隊員と

との人間オンライン授業の実施・文化交流を行っていた。日本と違って高校を卒業してからそのまま入学してくる学生ばかりではなく、自分で働いてお金を貯めてから入学してくる学生も多かった。そういった実態もあり、学生の中には私より年上の学生もいた。しかし、入学後も経済状況が厳しく、授業料が払えず授業に参加できない学生も多くいた。その光景を見る度に、日本はいかに恵まれているのかと感じると同時に、何もできない自分に無力感を感じ、やるせない気持ちになった。

ジンバブエに来て4ヶ月が過ぎ、活動や生活にも慣れ始めて2年間の見通しを立て始めた矢先、突然の緊急帰国が決まった。新型コロナウイルスである。大急ぎで荷物をまとめ、同僚や学生たちへの挨拶も簡略的に済ませ、首都へと上がりジンバブエを後にした。

後編は次号（67号）へ続きます。ご期待ください。



授業でサッカーを指導

“2022年度7次隊 オンライン壮行会に参加して

理事 帰国隊員家族 樋渡まち子

4月7日（木）にオンライン壮行会が行われました。コロナ禍、対面での壮行会が難しいため昨年より筑波センターの皆様の協力を得てオンラインによる壮行会を実施しています。

当日は、茨城県営業戦略部国際渉外チームリーダー竹村明浩様・同スタッフ山家仁美様、筑波センター所長陸好絵美子様、前筑波センター所長渡邊健様、OV会会長石森和磨様、筑波センター連携推進課スタッフの皆様に出席いただき、挨拶や励ましのお言葉を受けました。また当会からは事務局長並びに運営委員3名が出席しました。

今回派遣される瀬谷暁子隊員の職種は作業療法士、派遣国はペルーです。瀬谷さんは本来2年前に派遣予定でしたが、コロナのため待機されていました。待機期間中

は昨年の4月から1年、筑波センターで国内協力員として勤務されました。挨拶の中で、2年間不安な思いはあったけれども、この間の活動が大きな力になっていて決して無駄ではなかったと涙ながらに語っておられたことがとても印象に残りました。派遣後は首都のリマにある精神科の病院に配属されるそうです。瀬谷さんはとても明るくパワフルな方なので、現地での活躍が楽しみです。筑波センターのスタッフの皆さんから瀬谷さんの頑張りをたたえるお話をいただき、本当に暖かい雰囲気の中に会を終了することができました。

オンライン壮行会は、パソコンかスマホがあればどこからでも参加できます。参加者全員のお話を共有できるのも良い点だと思います。会員の皆様、是非参加してみてください。

余談ですが、外交官として活躍された数中三十二さんをご自身の著書の中で「協力隊の若者は現地の人々と共に汗をかき、苦勞を共にしてきた。このような地道な努力が世界で評価されている」と書かれていました。青年海外協力隊は本当に素晴らしいですね。私達育てる会も微力ながら隊員の皆さんの活動を応援し続けたいと思います。

なお、今回の壮行会の様子はJICA筑波のホームページに公開されています。

<https://www.jica.go.jp/tsukuba/topics/2022/dnb8qn0000004p8a.html>

是非ともご覧ください。



活動への意気込みを述べる隊員



つくばセンターで参加の小松崎事務局長

これまで・これからの事業について

■ これまでの事業報告

令和4年	1月8日(土)	第8回運営委員会	筑波センター
	31日(月)	(社)協力隊を育てる会新春の集い	東京
	2月8日(日)	機関紙「つくばね」65号配布	会員・関係機関
	3月5日(土)	第9回運営委員会	筑波センター
	4月2日(土)	令和4年度第1回運営委員会	筑波センター
	7日(木)	オンライン方式壮行会	筑波センター
	24日(日)	令和3年度会計監査	石岡市
	5月7日(土)	第2回運営委員会	筑波センター
	30日(月)	(社)協力隊を育てる会総会	
	6月3日(金)	令和4年度第1回理事会	筑波センター
	4日(土)	第3回運営委員会	筑波センター(中止)



■ これからの事業予定

7月2日(土)	第4回運営委員会	筑波センター
10日(土)	令和4年度通常総会	筑波センター
	機関紙「つくばね」66号発行	
	令和4年度1次隊県知事表敬訪問・壮行会	県庁・筑波センター
	第5回運営委員会	筑波センター
8月6日(土)	第6回運営委員会	筑波センター
9月3日(土)	第7回運営委員会	筑波センター
10月1日(土)	第2回理事会	筑波センター
	第8回運営委員会	筑波センター
11月5日(土)	2次隊県知事表敬訪問・壮行会	県庁・筑波センター
	機関紙「つくばね」67号発行	

事務局だより

会員状況 ()は家族会員

区分	令和3年12月末現在	令和4年5月末現在
個人	85 (2)	78 (2)
団体	19	19
計	104 (2)	97 (2)

編集後記

当会は本年1月26日で設立25周年となりました。

年間事業計画としては特別なことは現在のところ未定ですが、本号を「25周年記念号」としました。一年間にわたって関連記事を掲載できればと考えています。

コロナ禍はまだ収まっていませんが3年ぶりに対面での総会が開催されるなど、当会の活動も少しずつ戻りつつあります。

隊員派遣もペースが戻ってくれば嬉しいです。

会員の皆様方の生活も元に戻ってくることを願っています。